

実践記録

163

シリーズ

坂井輪地区公民館の青少年の居場所「じのび」

新潟市坂井輪地区公民館 非常勤属託 近藤 文子

はじめに

坂井輪地区公民館の青少年の居場所が毎週土曜日に開催されるようになって10年、2006年11月からは、公民館事務室の移転に伴って1階から4階へ移動、事務室の向かいにある定員24名のテーブルと椅子のあるスペースが「じのび」です。

家でも学校でもない「自分だけの空間を持つ」ということや、「青少年を地域で育む」という観点でこの事業に取り組んできました。その居場所ですれ違う人と人との関係から、自主的・自発的な行動につながり、子どもの自信となっていきます。そしてそこには場所があるだけではなく「人」の存在が欠かせません。わたしたちスタッフは、どの子どもも同じようにかかわり向き合うことを大切にしてきました。

現在の活動

「やること・アイデア・自分もち」がこの「じのび」のキャッチフレーズ。子どもたちの「やりたい」を支援する中から、ドラムの購入、中高生の音楽室利用が始まり、2005年子ども企画のライブを開催、2006年からは、坂井輪地域のお祭り「ふれあい坂井輪まつり」に居場所の子どもたちとバルーンアートのお店を出店し、特設ステージでは中高生のバンドが演奏しています。今年からはただバルーンを作って売るだけでなく、バルーンの作り方を子どもたちが小学生や幼児に教えることで、参加した子どもたちも自信をつけ、より地域に密着した活動になりました。

今年度からは土曜日だけでなく平日じのびを午後3時から5時まで開催しています。2008年に子どもたちにアンケートをとった結果では、「坂井輪地区出身の高校生、友だちに誘われて夏休み学習室に来



てじのびの存在を知り、勉強したり音楽室を利用する」のが平均的じのび利用者。利用してよかったことには「友だちができたこと、異年齢の人と知り合えた、公民館の人と交流ができた」などの声が聞かれました。

ユーススタッフの誕生

じのびのスタッフには「ユーススタッフ」と「おとなスタッフ」の2種類あります。ユーススタッフはじのびに来ていた子どもたちが「支えられる」側から、高校を卒業してからもここでの体験を生かして「支える」側にまわってくれた人たちです。利用者からユーススタッフに、そして地域のリーダーへというシステム作りができたかと思っています。

これからの課題

少子化や子どもの生活パターンの変化の影響で、フリースペースやバンドの利用が減少傾向にあります。今の子どもたちのニーズにあわせた事業の見直しが必要な時期となりました。今年度は、東日本大震災の影響で延期していた10周年記念のイベントを開催したいと思います。

